OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クリストファー・ドレッサーのジャポニスム序説 ：旧蔵資料に着目して
Author(s)	竹内, 有子
Citation	デザイン理論. 2020, 76, p. 146-147
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

クリストファー・ドレッサーのジャポニスム序説
旧蔵資料に着目して

竹内　有子　大阪大学

はじめに

19世紀後期の英国で活躍したデザイナー，クリストファー・ドレッサー（Christopher Dresser, 1834–1904年）は，1876年に来日を果たした。彼は，明治政府から請われて工芸の生産地の視察を行い，日本建築および文化の実情を西欧に伝えた。1882年，ドレッサーはこの体験をもとに『日本 ── その建築，美術，美術製品 ── *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures*』を刊行した。

ジャポニスム研究において，ドレッサーはその最初期の貢献者と位置付けられてきた。しかし先行研究は，彼がどのような日本の版本にアクセスして，造形の参考とし得たのかについて殆ど調査していない。同様に，『日本』に掲載された図版について，出典元の版本の特定も未だされていない。

発表者は，英国のウェルカム図書館が所蔵する，ドレッサーの旧蔵書を調査した。管見の限りではその他，大英博物館が旧蔵書の『名家習画帖』を，サンダーソン社アーカイヴが『増補頭書訓蒙図彙』を所蔵している。さらに同図書館は，創設者ヘンリー・ウェルカム（1853–1936年）がドレッサーの蔵書を得る機会となった，オークション目録を所蔵している。だが，先行研究においてこの存在は言及されていない。本発表では，ドレッサーが版本をいかなる評価のもとに自著に所収し，英国製品の質の向上や自らのデザインに応用しようとしたのかについて考察した。

ドレッサーと日本

ドレッサーと日本に関する先行研究は，三つの視点から記述されてきた。一点目は，彼のデザイン論と，日本工芸に対する評価との関係性について論じるもの。二点目は，ドレッサーのデザインに日本趣味がどう表れているか探るもの。三点目が，彼と日本の関係者との交流や影響関係について論じるものである。発表者は，三点目に関して新たな情報を得た。一つが，ドレッサーが来日時に携えてきたデザイン資料についてである。ドレッサーはサウス・ケンジントン博物館長の依頼に応じ，日本で建設が予定される内務省の博物館へデザインの寄贈品を持参した。東京国立博物館館資料館で調査したところ，「考案圖：自壹至六〇／ドレッセル考案」が実際に存在する。これはドレッサー著『デザイン研究』を60枚の大判の台紙に貼付したものである。台紙の裏面には，「明治9年美工寄贈」とある。この新出資料がドレッサーの持参した寄贈品である可能性が高い。もう一つが，ドレッサーの日本における血脈についてである。鈴木博之は，ドレッサーの曾孫としてスタンレー・ドレッサーを紹介した。それ以後，遺族に関する情報の進展は英国・日本双方になく，スタンレーの弟の存在は全く調査されていない。しかし，『婦人生活』の平林たい子の記事（1963年）等の記述から，管見では，マックス・ファクター日本支社長を務めたアルバート・ドレッサーが，当該人物と推定可能である。

ドレッサーの旧蔵書がいかに『日本』へ反映されたか

ウェルカムが所有したドレッサーの旧蔵資料5種は，①青木久邦編『調度図絵』初編1巻，②尾形光琳画『光琳新選百図』2巻，③吉村周山纂『画寶』6巻，④北尾政美画『心機一払』3巻，⑤『彫物絵本』2巻，である。とりわけ『光琳新選百図』が，旧蔵書の中では最も重要である。1巻の表紙にドレッサーは，「1877年日本で購入した光琳の100の図案」と記している。さらに2巻には，「最も名高い光琳による100の図案，これは日本で最も重要なパターン・ブックである」と書いている。彼の要約通り，同書は屏風・襖絵・扇面・硯箱・団扇・小袖等，光琳作品の精選図案集であった。

『日本』において図の用途は二つあり，日本で見た事物や風俗文化を紹介するものと，日本絵画を紹介するために版本を用いるものとがある。ドレッサーは同書の第二部で「日本美術の素描」を紹介するため，28の図絵を版本から引用した。それは，植物学研究者および教育者でもあった彼が，自然の表象を扱う日本の素描法を分析することに強い関心を抱いていたからであった。ドレッサーは英・日の方法論を対比させながら，日本の素描が自由な運筆の少ない筆致によって対象をとらえ，簡潔に表現していることを評価している。この掲載図版の典拠を調べた結果，28の図版のうち，『光琳新選百図』から8つの図が引用されていることが分かった。その他に『北斎漫画』からは，2つの図が引用されていた。

日本工芸の評価

ドレッサーが日本で視察した工芸について，彼の関心は陶磁器にあったと推察される。『日本』の序文で「68か所の製陶所を訪ね，訪問した殆どの所から見本を持ち帰った」と記しているからである。『スティーヴン・カタログ』は，1905年5月9日，ロンドンのコベントガーデンで開催されたドレッサーの所蔵品の売り立て記録である。タイトルが示す通り，主な出品は「陶磁器コレクション」である。日本のみならず，中国，インドなどの陶磁器・金工品・漆器・建築彫刻・本と型紙・金唐皮紙を含むファブリック類から構成され，全部で393組ある。日本のものと特定できる品物の大多数を占めるのが，陶磁器であった。産地や焼物の名称が記名されているケースはそれほど多くはないが，陶器のカテゴリーの中では，京都のものが多く目立つ。これは，ドレッサーの陶磁器訪問地とその評価を反映していると考えられる。

おわりに

ドレッサーが見た建築・日本工芸については自著の『日本』および石田筆録『英国ドクトルドレッセル同行報告書』にまとめられている。だが先行研究においては，日本の素描ないし日本画の意味するものについては問題にされてこなかった。加えて，これまでドレッサーが光琳を積極的に受容していたことも示されてこなかった。ドレッサーが光琳らの版本を『日本』で取り上げた理由は，それが工芸作品の図案として機能するからであった。彼が掲載した図版は，動植物・自然の事物が殆どであり，装飾デザインのモチーフとなるべきものであった。本調査で，ドレッサー著『日本』に掲載された素描の図解が，彼の蔵書に由来していたことが明らかになった。ドレッサーは，光琳の版本と芸術実践を，絵画と工芸の垣根を超えたところに成立する，理想的な芸術家として見なしたと考えられる。

一方，ドレッサー所蔵品の売り立て記録が示すのは，彼が日本の諸芸術からいかなるものを持ち帰り，何に関心を抱いていたかである。本発表では，ドレッサーが購入した日本の陶磁器見本に，京都の陶磁器と万古焼が多く含まれていたことを明らかにした。結果として，彼の日本陶磁器研究は，素描／絵画と工芸／製作物に横たわる区別を無くし，両者を一体とするデザイン術に昇華されたのではないだろうか。